

新春雑感



昭和 57 年の新春を迎え、誌面を拝借して会員の皆様に新年の御挨拶を申し上げます。

昨年 5 月に真藤前会長から会長を引継いでから早くも 7 カ月が経ちました。この間、真藤前会長が敷かれたレールの延長に

沿って、学会もどうやら無事に走って来たと言う所です。学会の基盤を揺るがせていた退会者の続出も、造船業界がようやく生色を取戻すにつれて暫減して、昨年は会員数の増減ゼロと云う状態になって来たことは喜ばしい限りです。

学会の事業も予定通り順調に行われており、夏季講座も担当の方々の御骨折りにより、大変盛会で、急拠会場を大きい所に変更する程でしたし、会誌の内容も歴代の編集理事と委員の方々の御努力で、大変くだけて読みやすくなったという評判です。又、造船用語集の編纂、復原性に関する国際会議、及び PRADS シンポジウムの準備等も着々進んでおり、学会も造船不況のドン底の頃に比べて、明るさを取戻して来たと言えましょう。

もっとも造船業の景気の立ち直りは、もう一息という所ではずみが付かず、やや横ばいの気配を見せていますが、これは立ち直りのキッカケとなった中型タンカーの代替建造と、バルクキャリアの新造とが一巡したためと見られています。又待望の大型タンカーの代替建造需要も、世界的な石油節約ムードによる消費量減少のため、かなり先に延びそうな様子です。従って当分は散発的に出て来る需要に対応出来るように、多種目小敷建造に向く様に造船所の生産システムを変換するとか、積極的に新しい船種の需要を創出する努力が必要であると云われております。又長期の視野に立つ場合、仮に需要が出てきても、造船業のような力が要ってしかも身体が汚れ

会長 元良 誠 三*

る、いわゆる dirty work に対する労働力が近い将来得難くなるという見通しに立って、造船の現場仕事を徹底的に省力化、自動化しなければならないという真藤提言についても、真剣に検討し、対処する必要があります。

これらの造船界の抱えている諸問題について、学会としては、講演会、シンポジウム、及び委員会活動を通じて意見や情報の交換をすることにより、技術ポテンシャルを高めることで本来の役割を果たしてゆくことは勿論であります。問題によっては、技術委員会単位で、直接問題に取り組むことも考えてよいのではないかと思います。

終りに会員相互の懇親について一寸述べさせていただきます。会誌 628 号の阪大の中村教授の書かれた随想によりますと、関西造船協会、西部造船会共に定款の中に、会員相互の親睦を計ると云う事が書いてあって、日本造船学会にはそれが無いとの事で、その為かどうか、確かに関西造船協会や西部造船会の方が会員相互の親睦の実が挙げられているように思われます。昨年秋長崎で行われた造船三学会連合講演会の懇親会が、180 人を超える参加者を集めて盛大であったのは、記憶に新しい所です。これは定款の為ばかりでないことは勿論で、伝統や、地域の違い、学会の規模等にも関係していることと思いますが、日本造船学会も、もう少し会員の親睦を計るという機能があってもいいのではないかと思います。

その努力の一環として今年の春季大会には、久しく途絶えていた見学会を復活して、他産業を見学して参考にとすることと、懇親の実を挙げることを企画していますので、奮って御参加下さい。又春季大会の後の懇親会に若い世代の人が出やすくする為に、クラス会を兼ねてもらったらどうか等と考えています。

思いつくままに、いろいろ申し上げましたが、今年は造船界が昨年にも増して明るくなり、学会の皆様も勇んで活躍出来るような年になることを祈りつつ、拙文を終わります。

* 東京大学船舶工科学